小 平 市 教 育 委 員 会 議 事 録

――８ 月 臨 時 会――

平成３０年８月７日（火）

平成３０年８月　教育委員会定例会

開　催　日　時　平成３０年８月７日（火）　午後２時００分～午後２時４８分
開　催　場　所　大会議室
出　席　委　員　古川正之　教育長
森井良子　教育長職務代理者
山田大輔　委員
三町章　委員
説明のための出席者　齊藤豊　教育部長
出町桜一郎　教育指導担当部長兼指導課長
川上吉晴　地域学習担当部長
余語聡　教育総務課長
荒木忍　教育施策推進担当課長
本橋義浩　指導課長補佐
中村和哉　指導主事
窪田隆徳　指導主事
小影俊一　指導主事
書　記　山本真由美　教育総務課長補佐、塚本真也　教育総務課主任
傍　聴　者　３０名

午後２時００分　開会

（開会宣言）

○古川教育長

ただいまから教育委員会８月臨時会を開会いたします。

なお、本日は、高槻委員から、ご都合によりご欠席との届け出をいただいております。

傍聴者の方にお伝えいたします。

入り口でお渡しいたしました傍聴券の裏面に注意事項が記してありますので、ご了解のうえ、傍聴中は静粛にしていただき、円滑な会議の進行にご協力いただきますよう、お願い申し上げます。

（署名委員）

○古川教育長

それでは、はじめに、議事録署名委員の指名を行います。

本日の議事録署名委員は、三町委員、及び私、古川でございます。

（協議事項）

○古川教育長

それでは協議事項を行います。

協議事項、平成３１年度から平成３２年度使用中学校教科用図書についてを議題といたします。

はじめに、本年度の中学校教科用図書の採択について、これまでの経緯の説明をお願いいたします。

○出町教育指導担当部長

中学校教科用図書の採択について、これまでの経緯をご報告いたします。

本年４月１９日の教育委員会定例会におきまして、平成３１年度使用中学校教科用図書採択方針、平成３０年度小平市立中学校教科用図書採択要領及び同細則を定め、これに基づきまして、５月１０日に学識経験者、保護者代表、中学校長、副校長で構成される小平市立中学校教科用図書審議委員会及び同審議委員会の下部組織であります教科用図書調査部会を設置し、委員の委嘱をいたしました。

同調査部会では、発行者ごとに専門的な調査研究を行い、調査資料をまとめ、６月１１日に同審議委員会に提出いたしました。

また、６月２日から７月２日までの間、市内６館の図書館におきまして、教科書の見本本を展示し、あわせて市民の方々を対象としたアンケートを実施し、ご意見等を寄せていただきました。

各中学校におきましても、各教科書の調査研究を行い、その結果を報告書としてまとめ、同審議委員会に提出いたしました。同審議委員会からは、これらの資料をもとに検討を重ね、まとめたものを同調査報告書として、７月１９日に提出いただきました。なお、教育委員の皆様には、同審議委員会からの報告書のほか、各学校における調査研究報告、各教科書発行者の教科書編修趣意書、東京都教育委員会が作成した調査研究資料、図書館で実施したアンケートの写しをお渡ししているところでございます。これらの資料もあわせてご参照いただき、ご協議いただきたいと存じます。

○古川教育長

ありがとうございました。

今年度採択する中学校教科用図書につきましては、特別の教科道徳の１教科、１種目でございます。

協議の手順といたしましては、本日は委員の皆様からご意見をいただき、採択を決定する議案に載せる教科用図書の候補を２者から３者程度に選定いたします。

８月１６日の教育委員会定例会では、さらに候補を１者に絞り込み、協議終了後に議案を作成し、審議する予定でございます。

それでは、中学校教科用図書の見本本も用意されておりますので、適宜ご参照いただき、また、既に７月定例会で報告をいただいております「小平市立中学校教科用図書審議委員会報告」につ

いても参考にご協議願います。

なお、特別の教科道徳につきましては、発行者８者から見本本の提出がございました。図書名を申し上げますと、東京書籍が「新しい道徳」、学校図書が「輝け　未来　中学校道徳」、教育出版が「中学道徳　とびだそう未来へ」、光村図書出版が「中学道徳　きみがいちばんひかるとき」、日本文教出版が「中学道徳　あすを生きる」、学研教育みらいが「中学生の道徳　明日への扉」、廣済堂あかつきが「中学生の道徳　自分を見つめる１」、「中学生の道徳　自分を考える２」及び「中学生の道徳　自分をのばす３」、日本教科書が「道徳　中学校１　生き方から学ぶ」、「道徳　中学校２　生き方を見つめる」及び「道徳　中学校３　生き方を創造する」となっております。

それでは皆様、ご意見を伺いたいと思います。どなたか発言をお願いいたします。

○森井教育長職務代理者

意見を述べさせていただきます。

特別の教科道徳については、２０１１年１０月に起こった滋賀県大津市のいじめによる自殺に端を発していることから、人間としての弱さを見つめながら、それを乗り越えてよりよく生きようとすることのよさを学校において教師が生徒とともに考える姿勢が大切であると考えます。

道徳の時間は思いやりの心、生命を大切にする心、努力する心などの人間として生きていくうえで必要なこと、人間らしさを身につけていくための基礎・基本となる道徳的価値とされる人間らしいよさを各教育活動につなげるための要となるものです。また、幼児期から小・中における児童・生徒の発達段階や特性、そして地域の実情等を考慮し、適切に授業を進めるうえで、さまざまかかわりを通して身につけていくべきものであると言えます。

道徳の授業では、今回子どもにとっての対象の広がりに即して整理され、順序の入れ替えのあった四つの視点である自分自身、ほかの人、集団と社会、そして生命や自然、崇高なものとの豊かなかかわりの中から、おのずと人間らしい心を育むことにつなげることが必要であり、特に中学校段階においては、社会の一員として自分の生き方を探求するなど、人間としてのあり方、生き方についての自覚を一層深める指導の充実が求められるのです。

以上の観点を踏まえ、各出版会社の教科書編集趣意書、東京都教育委員会から出された教科書調査研究資料、そして市内中学校教科用図書の調査部会並びに審議委員会の調査報告書、市民の皆様から寄せられたアンケートや要望等を考慮して、各社の教科書を読ませていただきました。

道徳の教科書だけあって、各社とも限られたスペースの中でもしっかり生徒に身につけさせたい力を身につけることのできる内容で、私自身も感動したり考えさせられたりしました。生徒が１年間３５時間の中でこれらの題材でしっかり学んでくれたら、自ら感じ、考え、判断し、道徳的実践ができる力を身につけてくれるのではないかと期待せずにはいられないほどです。

しかし、中学校での道徳は、ほかの教科のように授業だけをすればいいというのではないというお話も耳にしています。先ほど申し上げた中でも道徳の授業は道徳教育の要として各教育活動における道徳教育を補充、深化、統合する役目を担っています。そのことからも豊かな体験活動

や、日常生活での指導、そして各教科等での指導が大切であることは言うまでもありません。

そういう意味からも、１時間の授業がより学習目標に近づくものになるために、生徒や教師にとって手立てが示されていることも重要であると考えました。教材ごとに考えるポイントや達成すべき目標など、学習が効果的に進められるような配慮がされている教科書という観点からいうと、８者中６者に絞ることができます。また考え、議論するという実践的な道徳活動につなげるための手立てが示されているのは、８者中４者であるとの学校からの報告があります。

そして、今回の道徳で最も取り上げるべきと感じている、いじめ問題に関する教材を多く扱っていると思われるのは、８者中２者との報告がありました。そのような報告とともに、もう一度教科書を見ました。中学生になっても教科書の表紙はいつも目にするものだけに、大切であるという観点から見ると、表紙を見て中学校の道徳で学ぶべきことが想像できるのは人とのつながりの大切さを感じさせる学校図書と日本文教出版です。

巻頭に道徳の学習の進め方や考え方を明確にわかりやすく示しているのは東京書籍、学校図書、日本文教出版。読む題材が多いことから文字の大きさは重要であると考えたところでは学校図書、教育出版、日本文教出版。東京書籍は本文に入る前の説明文がやや小さい印象がありました。また生徒が持ち運ぶことを考えたときに大きさ、重さを考慮すると、ほかの教科書と一緒に持ち運びやすいＢ判の大きさがいいのではないかと思いましたが、学校に置いておくというような現在の状況であれば、その点は気にしなくてもいいのかもしれないとも思いました。

内容で印象に残ったのは、日本文教出版の２年、「いじめと向き合う」という単元の３２ページ、５月の風－カナーと、３６ページ、５月の風－ミカーです。仲の良い友達の間に起きたいじめともとれる話が当事者双方の目線でつづられており、生徒にも自分のことに置きかえて感じることができる内容であると考えました。

また、東京書籍の２年、１３０ページから１４３ページまでの、「いのちを考える」では、ホスピスでボランティアをしていた主人公の経験をつづった奇跡の１週間と、妹の誕生を機にその思いを詩にした「妹に」を通して、今ここにある自分の命との三つの命について考えさせる教材は、生徒にとっても取り組みやすいと感じました。

ほかにも読み物としてはすばらしい内容のものが多く、迷うところでしたが、先ほど述べたさまざまな観点を総合して、私としては日本文教出版、東京書籍、学校図書のいずれかの教科書で小平市の中学生に道徳を学んでほしいと思います。

○古川教育長

ありがとうございました。

ほかにございますでしょうか。

○山田委員

このたびの平成３１年度から小平市立中学校において使用する道徳の教科書採択に際しまして、私は特に小・中連携の観点からも接続の中学校１年生教科書を拝見させていただこうと思うので

すが、とはいえ、今回から中学校道徳が始まるという観点からは３学年一斉同時にではありますが、小・中連携という観点でまずは見させていただこうと思いました。

調査報告書などから、全ての教科書におきまして、内容と構成上の工夫を参考に、私は教科書の表紙デザイン、教科書内の挿絵やイラスト、画像、フォントサイズ、あとは手に持ったときの持ちやすさであるとか、大きさや厚みなどのサイズ感覚、授業でいうところの目当て、振り返り。また道徳を学ぶことで、我がことのように感じ、考え、行動に移すことができるようになることが、この教科を学ぶことで最も重要ではないかと考えております。

読み物としても、それを身近に感じ、捉えられる題材か否かということも拝見させていただいた結果、私は結論から申しますと、東京書籍と日本文教出版の２者にまず絞ってみました。もちろん委員の皆様の最終的な意見をトータルして、また改めて見直すこともあると思いますが、まずはこの２者に絞らせていただきました。

東京書籍は表紙のデザイン及び挿絵やイラストが、１年生から３年生まで清潔感を感じました。シンプルで見やすく、かつ、とても親しみやすく感じまして、他者と比べユニバーサルデザイン的にかなりの好感を持った次第でございます。とにかく全体的にとても淡い配色と申しますか、目と、そして心に優しい教科書だという印象を受けたところでございます。

調査研究のご意見に１年生の教科書から「選手に選ばれて」は、生徒によっては、決まりは守るものと押しつけに感じる可能性があるというようなご意見もありましたが、私が読ませていただいて、全体主義の意見に対し、個人の意見を対等にしっかりと言えているストーリー、物語であるので、そこは問題ないと感じました。

また同様に、「新しいプライド」という読み物が、生徒によって労働を奉仕にすり替えていると感じる可能性があるというふうなご意見がありましたが、この意見は私には全く理解ができませんでした。ひとつに私は、奉仕は人生最大の仕事であると学んでおり、またそれ以前に仕事をするうえで、例えばお客様の笑顔であるとか、こういったものは当然であると思っておりますので、うがった見方をすればこのように取れなくもないのかもしれませんが、私はこの文章からはその意見の発想が生まれること自体が余り理解できませんでした。

いずれにせよ、さまざまなご意見がありますが、どちらの出版社の教科書を使うにせよ、授業でいかに先生が生徒に対して道徳的に導いていけるかどうかということだと思いますので、こういったさまざまな考えが出てきているものも、例えば生徒間でディスカッションをさせられればいいというふうに感じています。

続きまして、日本文教出版ですが、表紙デザインは東京書籍と同じイラストレーターでしょうか、とても似ているデザイン、イラストでございます。好感度もとても高く感じています。挿絵やイラスト、あと写真など、豊富に使用されておりまして、見やすさを追及しているというふうに思いますが、表紙も中身も東京書籍と比べまして、私的には全体的には色味が濃く写りまして、少し目に痛いというか、優しくないというふうにも感じられております。

調査研究のご意見に、１年生の教科書から、「ゆうへ、ー生きていてくれてありがとうー」、２０数年前の阪神淡路大震災の内容のストーリーでございますけれども、つながる命をテーマと

しているという読み物でございます。見方次第では生き残った妹が母の苦しみの犠牲になっていると捉えることができる、このような意見があったのですが、そこが授業の進め方の腕かというふうに思いました。

それぞれの立場から考察して、否定的な思考回路ではなく、肯定的なものの捉え方、考え方で全てを捉えていくべきだと思っております。ですから、このストーリーも特に私的にはこういったご意見がある中、問題はないというふうに思っております。

ちなみに、２者に絞ったと言いつつ、あと光村図書出版の話をさせていただきたいと思うのですけれども、表紙デザイン、とても爽やかな色合いも多く、とても私は好感を持っております。ページを開きますと、挿絵というか、全体的に、見方によっては文字が見やすいのか見づらいのかと意見が分かれるところかと感じておりまして、東京書籍と比べますと、私的には色見が目につくところが気になっているところでございます。

内容的に調査研究のご意見で、同じく１年生の教科書「エルマおばあさんからの『最後の贈りもの』」は、話の内容と写真が生徒によっては受け入れがたい可能性があるというようなご意見がございました。確かに、死という重いテーマですが、生徒にとって何を学ばせたいかということで死生観というものは道徳で避けては通れないと思っておりまして、実生活で核家族化が進んできている昨今、身内の死に目にあえないケース、また自身の親、家族が老いを重ねるとはどういうことかということを、家族と暮らしているからこそ、当たり前にわかっていたことが、今はもしかすると当たり前に理解していない子どもが増えているのではないかというふうに思っておりまして、そういうことを家族で学んでいく道徳観というものも感じています。

そういったことを知るからこそ心が優しくなれるというものが非常に強いと思います。現代社会の日本には宗教観というものが、または哲学であるとか、そういったものがなかなか浸透していないということもあり、死生観を道徳で学んでいかないと、もしかすると現代社会においては、感じられることが少ないという感じがします。こういったことを考える機会というものも含めて、こういった題材も余り気にせず、それは先生の力量にも、腕にもよりますけれども、必要なことではないかというふうに思いました。

いずれにせよ、道徳の授業を取り上げるうえで、このことが学校生活、または普段の生活にしっかりと活かせるものになるようにしていただきたいと思います。

○古川教育長

ありがとうございました。

ほかにございますか。

○三町委員

教科書の選定にあたってということで、自分の考えを少し述べさせていただいてから絞り込みということでの話をさせていただけたらと思っています。

もちろん、この特別な教科道徳ということで教科化された一つには、大きな問題として先ほど

森井委員からもありましたように、いじめ問題への対応、その一つの方法として、道徳の時間の充実というようなことが挙げられていたと思います。そういう意味でもいじめ問題にかかわる扱い、あるいは情報モラルだとか、さまざまな現代的な課題に対してどう扱っているか、こういうことが大事だと思っています。

それからもう一つは、今回の道徳の教科化の中では、子どもが考え議論するというようなことが強調されているかと思います。そういう意味からこれまでの道徳の指導法の改善といいますか、そういうことにはっきりと打ち出しているようなところがわかるような教科書がいいと考えられます。具体的にはどの教科書もそのことをうたっておりますし、そういうふうにされていると思います。

自分なりに見ていこうと思ったのは、子どもにとっても学べ、そして指導者も学べるというようなところが必要ということ、２面で考えていきました。

どうその題材について考えさせていくのかというところでの設問の仕方、これは大きいところだと思います。教科書会社によってはあえて二つだけにしているとか、多くの設問中から選ぶというようなところもあって、その学ばせ方、発展のさせ方、つまり問いかけの扱いをどうしているのかということが一つあります。

それから、学んでいくときに、その題材のタイトルのつけ方、そこで何を学ぶのか、どういうことを考えていけばいいのかということが、わかるか。そういうことも重要なことだと思います。あえてタイトルのみのところもあれば、内容項目そのものを書いているところ。または、子ども向けの内容項目というのですか、そういうことを学べるような絵を描いている、そういうところの差があるように思いました。

それから、大事なのは考え方を深めるための方法で、自分の考えをベースにしながら表現していくと、活動としては教科書の中で問題解決的な学習だとか話し合い活動、そういうところがかなり強調されているところも大事だと思いました。

もう一つ、道徳の授業で自分も中学校で教員をした経験がありますし、今も学生を教えている立場ですが中学校の指導者そのものが、大学では道徳の単位がないと免許を取れないわけですが、指導案を作るくらいまではできると思います。ただ、実際に教育実習で中学校に行ったときに道徳の授業の指導案を作ってきちんとやれているかどうか、そういう現実も考えると、少し不安を感じています。もちろん、特に私立大学から中学校の教員になっているものの多くは、自分の専門性についてはかなり自信があるのでしょうけれども、道徳の時間についてはやや不安があるということも感じています。そういう意味では、教師自身も教科書を通して学ばせ方を学べるような、そんな工夫も必要だろうということを感じています。

最後に、その学び方を振り返らせるというような意味では、どういう振り返りのさせ方をしている、つまり評価についての扱い方ということで見ますと、学期ごとの振り返り、年間の振り返り、光村図書出版では４シーズンに分けている振り返らせ方。また、特に残念だったのは少なかったのですけれども、内容項目そのものを段階評価するという教科書もありました。そういうところについては、自分としては疑問を持っています。

学習に対してどう自分は取り組んだかというようなところを段階で評価している。これはいいかと思いました。そういう意味での評価のさせ方といいますか、そしてその評価を見て、教員も子どもの成長を判断できる。そういうものがいいという、そんな観点で見てきました。

そうやって絞り込んでいったのですけれども、もう一つは命にかかわっての扱いは一部学校からも意見が出ているのですけれども、今回その結論は出さないで、生命尊重の扱いは発達に応じてどの段階でどう扱っているのか、これは教科書を絞り込んだ後で、どういう教材の配列をして学習、感じさせようとしていくのかというところで見ていこうかということで、考えをとりあえずとめております。

そこで、まず消去法といったら失礼ですけれども、道徳の内容項目について、３段階なり４段階なり５段階で自己評価させるということ自体、疑問だということで、その教科書会社については申し訳ないのですが、初めから対象外にしました。それがいけないということではないのでしょうけれども、教員そのものが評価についてのことを誤解する可能性もあると考えました。

それから、題材の冒頭の扱いのところも、先ほど話した子どもにとっても何を学ぶのか、あるいは教師にとってもどういう焦点でもって学ばせるのかというのを、ある程度意識できるほうがいいということから、題材のみタイトルのみという教科書会社についても、これは対象外にさせていただきました。

そうなると、東京書籍、学校図書、それから光村図書出版、日本文教出版まで絞り込めました。それぞれ見てどうかということであったのが、ノートの有無で、日本文教出版と廣済堂あかつきはノートがあります。廣済堂あかつきについては、もうほかの項目からしても消えているのですけども、教科書の目次と対応させる内容項目ごとにノートはつくられています。しかも、題材が少し変わっており、扱い方が難しいかということで、ノートについての廣済堂あかつきについては疑問でした。

それから、日本文教出版については、本文の質問そのものをノートの中で項目立てている。評価の部分がついていていいのですが、別冊のノートにする必要があるのかとの疑問です。これは道徳の時間のノート指導なり、教師のプリント等での対応でポートフォリオ的に作っていけば学習の学びは蓄積でき、分冊にする意味を感じなくなったので、日本文教出版も消させていただきました。現在、東京書籍、学校図書と光村図書です。

東京書籍については、生徒用向けの内容、項目が書かれているということ。それから題材の問いかけについて二つというのは、１年生が多いのですけれども、調べていたら３年生だと３段階くらいまで上がっているということで、ここについては、改めて評価し直さなければいけないというようなところがありますけれども、東京書籍は候補として残しています。

それから、学校図書については、評価が一応毎時間、そして学期ごと、年間ということでできるような形になっているということ。それから、これについては冒頭の取り扱いとしては生徒向けの内容、項目もある程度書かれていて、そして教師向けも書いてあります。教師向けは必要なのかというのが、ほかの教科書を見ていても感じるところですけれども、学びの姿勢は見えているということで、候補として残しています。ただ、生命尊重、国際貢献とかの扱いの中で写真が

というようなこともありますので、これについては先ほど言いましたように調べていきたいと思っています。

それから、光村図書出版についても同じように扱いとしては教師向けの内容項目ですけれども、題材のまとめの問いかけのところが学びのテーマという形で、一つの確実に１ページ取っての理解ができるような形、これは特徴的なので、評価をさせていただいています。ここでも命にかかわる取扱いも書かれているので、これについても調べていきたいと思っています。以上３者ということで、東京書籍、学校図書、光村図書出版を残させていただいています。

○古川教育長

ありがとうございました。

それでは、私の意見を発表させていただきます。

発行者８者について、教科用図書審議委員会と教科用図書調査道徳部会より、全ての教科書が学習指導要領に基づき、正確かつ公正であるとの報告がありました。また、内容や構成上の工夫についても、それぞれの発行者のよい点や工夫をしている点についても報告がありました。

私は、学習指導要領に示されている、「生徒が問題意識をもって多面的・多角的に考えたり、感動を覚えたりするような充実した教材」であり、読み物の登場人物の心情理解のみに偏った発問ではなく、「生徒が深く考えることができ、人間としてよりよく生きる喜びや勇気を与えられるもの」として活用しやすいものという観点で検討しました。また、道徳教育の改善に関する議論の発端となったいじめ問題に対して、生徒が主体的に対処することができる力を育成するという点を重視しました。判断にあたっては、各学校から届いた調査研究の結果と市民の皆様からの意見も全て読みました。

その結果、東京書籍の「新しい道徳」と、日本文教出版の「あすを生きる」を推薦します。

まず、東京書籍の「新しい道徳」は、教科書のはじめに見開きのページで「話し合いの手引き」が掲載されているなど、「議論する道徳」に即しています。目次がとても見やすく、１年間で何を学ぶのか見通しをもつことができます。いじめや生命尊重を扱う教材が強調されています。大きく鮮明な写真が配置されてあり、生徒への意識づけとなっています。発問は、教材の内容に関するもの１題と、生活への振り返りという視点の１題を基本としており、読み物の登場人物の心情理解のみに偏った発問にはなっていません。巻末には、ホワイトボード用の用紙と心情円がついているなど、よく工夫されています。教科書の大きさはＡＢ判と大きく、１ページの情報量がやや多いと感じますが、重さはＢ５判のものとは変わらないなど、生徒の発達の段階を考えています。

続いて、日本文教出版の「あすを生きる」は、目次や「道徳科で学ぶこと・学び方」、「この教科書で学ぶテーマ」が巻頭にあり、教科書をどのように使うのかというイメージをもつことができます。役割演技等体験的な学習に取り組むことで「考え議論する道徳」が実践できると思います。いじめ防止に関する内容を扱った教材が大変多いと思いました。発問は、教材について考える「考えてみよう」と、自分の生活に振り返る「自分に＋１（プラスワン）」の２問が設定さ

れていて、発問数も多くなく、使いやすいです。また、教材が偶数ページにおさまるように工夫されていることも学習しやすいと思いました。「道徳ノート」がついており、授業の記録を残すことができ、教員が評価するときの参考にすることができると思いました。

ほかには何かございますでしょうか。

○三町委員

私が日本文教出版を入れていないのは、ノートが必要かどうかということでの判断で、あえてつける必要はないと思ったからです。それだったら、中学校の普通の教科書は普通でいいと思っています。ほかの委員の方も日本文教出版を推薦されているので、このノートについてどう評価したのかということを教えていただけたらと思います。

○森井教育長職務代理者

私は学校の授業を見せていただく中で、先生方が道徳に限らずいろいろな授業でプリントなどを用意されていますが、それによって時間がとられるのではというイメージがあります。ノートがちゃんとついていて、それが教科書の設問と合致しているものがでれば、そのプリントを作る作業が省かれるというところもありますし、先ほど私も申し上げましたけど、教科書をもしも置いて帰ったとしても、ノートで授業を振り返ることができるということもあり、私はこの日本文教出版のノートはあることが有効であるというふうに感じました。

○山田委員

この全８者のうち、ノートがついているのが日本文教出版と廣済堂あかつきの２者ですけれども、この調査研究のご意見のところでは、ノートがあることでの肯定的な意見と、ノートがあることでのアレンジができないなどといった意見の両方とも載っていたので、私は、どちらのご意見もあるのではないかと思っております。余りノートに関しては意見の中に組み込んでいないということが私の意見でございます。

○古川教育長

私の意見としては、先ほど申し上げたとおり、学期末、年度末に先生方が振り返るときにそれは有効な資料になるのではないかということで、ノートがあること自体が悪いということではないとそのように判断いたしました。

○三町委員

私は、聞いていて、そこが対立する部分なのかとは思いました。あえて、本文には同じ項目の質問をされているということであれば、そんなに大変な準備はないと思いました。道徳ノートということで１冊普通のノートを使ってもできる。それがつながっていくという、そこでの評価の違いがあったと自分では今受けとめたところです。

ここで議論を続けるつもりはありませんので、ありがとうございました。

○古川教育長

それでは、委員の皆様の意見を総合いたしますと、議案候補は、発行者名、東京書籍、図書名「新しい道徳」、発行者名、日本文教出版、図書名「中学道徳　あすを生きる」の２者が妥当かなと思うのですが、２者でよろしいでしょうか。

○森井教育長職務代理者

私はその２者でいいと思います。

○古川教育長

わかりました。

○三町委員

光村図書出版は私しか出ていないということですから、それをあえて強くもう一回見直してほしいというほどのものではないです。ただ、よかったというのは、学びのテーマの扱い方がほかとは違って、たくさん質問があると思いました。議論する観点でたくさん書かれているので、光村図書出版ではなくても、単に二つの質問項目、三つの項目でなくても何か指導方法として、こういう幅があるといいのかということだけであって、結構でございます。

○山田委員

私も８者から何とか２者に絞り込みました。と言いながらも少し光村図書出版に触れてみたりもしておりますけれども、次回の定例会に向けて東京書籍、日本文教出版、この２者に絞り込んで、これからさらに調べたいと思っています。

○古川教育長

ありがとうございました。

それでは、今、確認させていただいたとおり、東京書籍と日本文教出版、この２者に絞りたいと思います。よろしくお願いいたします。

以上で、本日の協議を終了いたします。

次回、８月１６日に、本日の協議結果に基づきまして、候補を１者に絞り、それを議案の原案としたいと存じます。

終わりに、次回の教育委員会は、平成３０年８月１６日木曜日、午後２時から市役所６階大会議室で開催いたします。

なお、参集時刻は午後１時３０分といたします。

以上で、本日の日程は全て終了いたしました。

これをもちまして教育委員会８月臨時会を閉会いたします。

午後２時４８分　閉会